

# ネパールの風

’ 98ネパール日記

ヤラ・ピーク登頂記 その・6

後藤 隆徳

から上は人の住む村はなく夏に放牧をするカルカ（放牧小屋）があるだけだ。フラフラと歩いて行くと、懐かしい？高岡、今泉が顔をクシャクシャにして出迎えてくれた。

2人は今日高度順化のために裏山のキャンジュン・リー（4350m）に登ってきたとのこと。これでまた4人揃った。ひと安心である。

B隊の他の人もとても喜んでくれた。中でも九州の居酒屋の女将のアリトミは「私は絶対来ると思った。だって、しっかりした岳人だもん」と優しい笑顔で言ってくれた。



キャンジュン・ゴンバ（3850m）は北に盟主、Langtang・Lirung（ランタン・リルン、7225m）、Kimshun（キムシュン・6745m）、南にNaya・Kanga（ナヤカンガ・5844m）、Ponggen・Dopku（5930m）の高峰に囲まれた広々とした実に気持ちのよい所だった。かつて氷河時代には氷に覆いつくされ、このような地形が出来たのであろう。

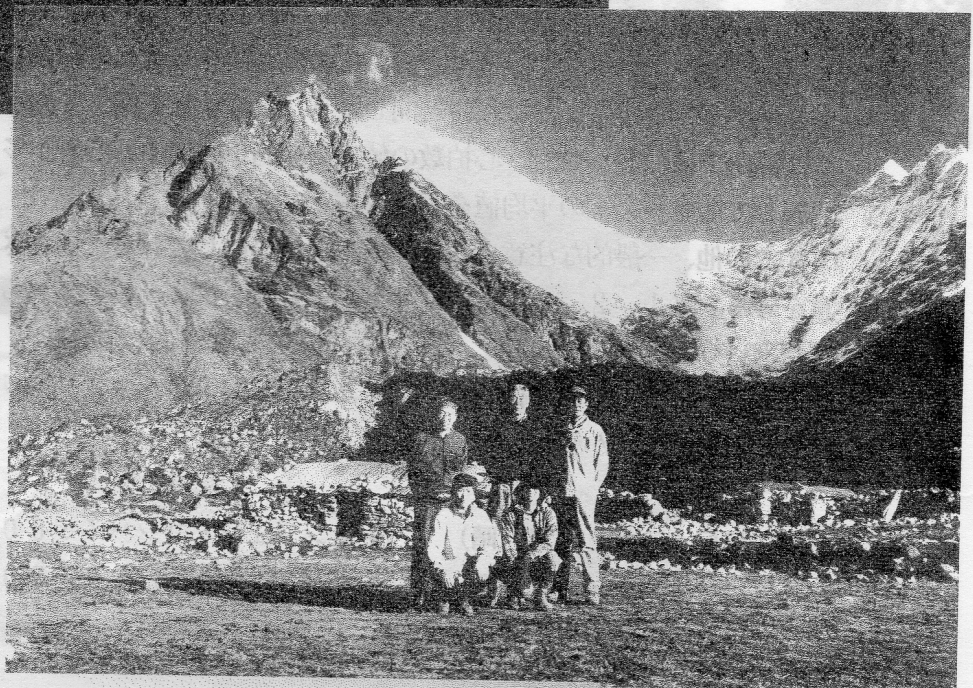
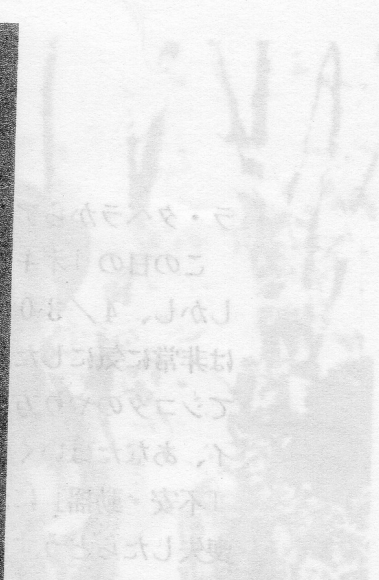
旦那が20歳、奥方が18歳の若い夫婦が経営する「キャンジュン・ゴンバ」というロッジの前にA・B隊のテントを張った。風薫り、さんさんと降り注ぐ太陽。眼前にようやく芽吹いた草原が広がり、のんびり流れる白い雲の向こうに銀嶺が光り、番（つが）いの馬がのんびりと草を食んでいた。正にランタンは春爛漫だった。

体調はまだ今一つで相変わらず食欲はなかった。特にやることもないので、テントでゴロゴロし、もつぱら養生に努めた。

夕食時、シコタが「オキシメータ」を使って動脈血酸素飽和度（SpO<sub>2</sub>値）をチェックする。人間は酸素がないと死んでしまう。高所では気圧が下がり空気が薄くなる。酸素の摂取量が少ないと身体は正常に機能しない。いわゆる高山病といわれるものだが、高所ではいかに効率よく酸素を取り入れるかが重要な課題になる。

また、極度に乾燥した高所では体の脱水が著しく、血液濃度が上がり流れが悪く、ヘモグロビンによる酸素の運搬量が低下し凍傷、視力低下、更には肺水腫、脳浮腫などの致命傷に陥ることがある。

従って、極力水分を摂取する必要があるが、強制的に飲水を促進させるため、今回はゴ



(上) キャンジユン・ゴンバ  
 から見た雪火煙  
 を上げるランタン・  
 リルン  
 (中) キャンジユン・ゴンバ  
 の朝  
 (下) 4/9 朝の出発



ラ・タベラからアセタゾラミド（ダイアモックス）という、利尿剤を服用した。

この日の「オキシメータ」の値は、まだ低地であり全員が80以上とまらずまらずだった。しかし、4/30のアタック前日、ベースキャンプで加藤の値が70とちょっと低く本人は非常に気にした。値は65以上あれば良しとのことだが、それにしても、ハッキリ言ってシコタのやり方はマズかった。それはそうだ、全員の前で「ハイ、あなたはいくつ。ハイ、あなたはいくつ」と公表されれば、値の高い人は「安心・自慢」だろうが、低い人は「不安・動揺」にかられる。このあたりが彼のプロらしからぬ所で、これで本人が自信を喪失したらどうするつもりだったのだろうか。私は不愉快で改善を求めた。

また、計測は全て一日の行動後であったが、本来正確を期するなら①朝、目覚めたら直ちにシュラフから出ず仰臥位で計る。その際、身体を激しく動かしたり、深呼吸をしたりせず、出来るだけ眠っていた時と同じような安静状態を保って測定する。

②高所では、SpO<sub>2</sub>、心拍数の値は周期的に脈動することが多いので、1分間くらい連続して観察し、その平均値を記録する。

③この他、一般的な注意として、指をきれいにして計る、揺らさないで計る、などの注意を守る。（1、2、3、岳人98/12月号、N0・618から転載）などの配慮が必要だという。

夕食を済ますと早めに休んだ。シェルパのテントからマンダラーの独特のバスと陽気なシェルパ達の歌声が響いた。

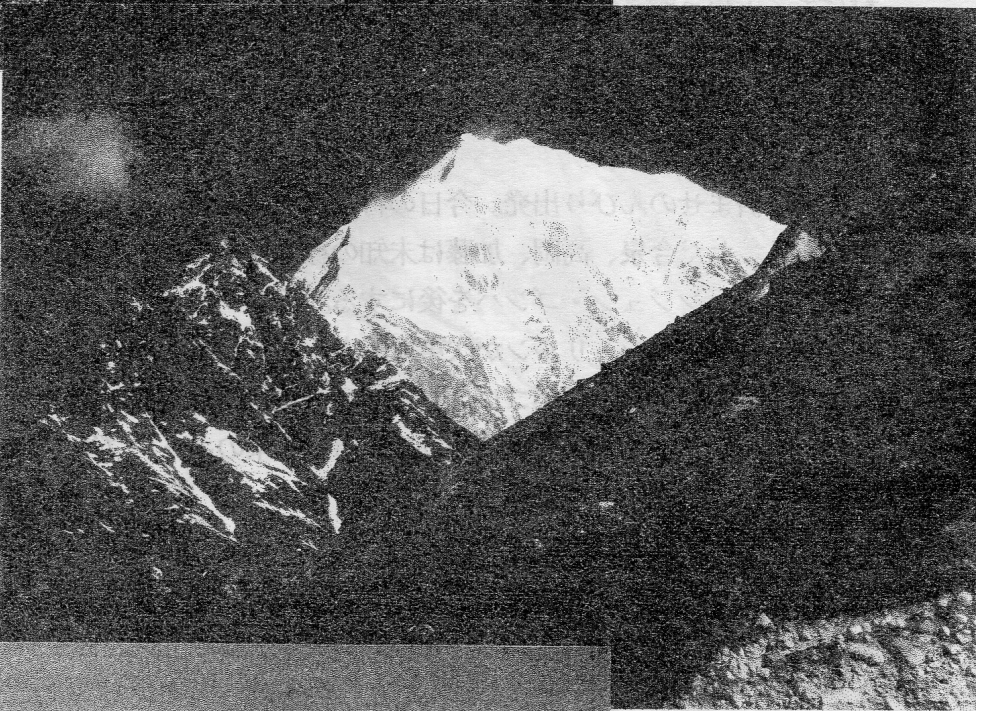
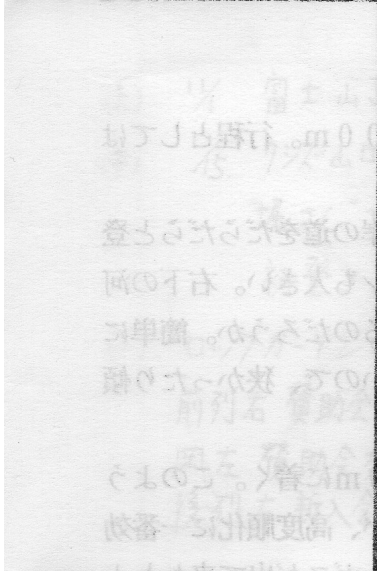
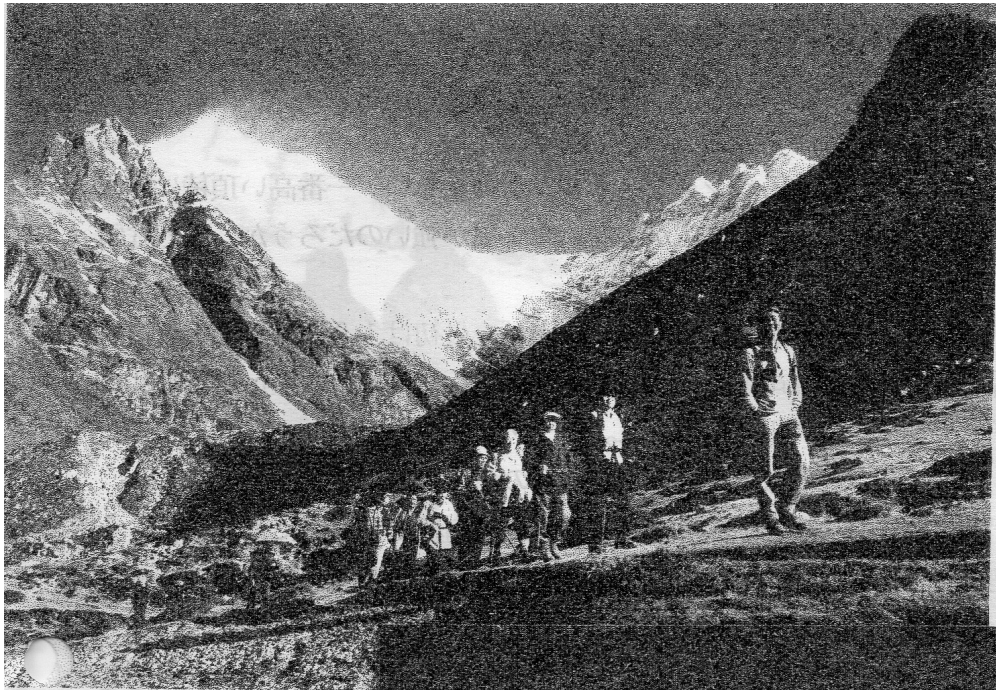
第7日目 4月29日（晴） キャンジュン・ゴンバ7:00～ティキャブサ・カ  
霜・5:30 ルカ（4400m）10:30  
テント内4度

## 神様、仏様、正露丸サマ

昨夜はまらずまらず良く寝れた。食欲はいま一つだが熱はもう全く心配ない。腹の調子も悪くなかった。実は昨日テントの中で今泉の荷物をふと見ると「正露丸」があった。私は日本ではまず世話にならないものであるが、何故か飲む気になった。

今泉に聞くと「結構、イイよ」とのこと。3錠ばかり飲んだが、効果があったようだ。そういえば、香港で大きな看板を見たが海外でも評価されているのだろうか。とにかく、私の腹の具合はこの「正露丸」のおかげで、この日を界に急速に好転していった。余談だが、5月1日のアタック日には途中の氷河で、硬からず柔らかからずの「極上」のモノが2回も「噴出」し、今日は「ウンがイイ」と快哉を叫んだものである。本当に私にとって「正露丸」は「神様、仏様」になったのだ。

夜明け直後カメラを持って昨日高岡達が登った裏山の途中まで登る。ピリピリとした空



富士山  
登るに  
高度が上がるにつれて  
ランタン・ツルン  
カラバン途中  
からホカ  
ド7°7 (5930m)

(上) のんズリトレッキ  
はツツク  
(中) 高度が上がるに  
つれ 大きくなる  
ランタン・ツルン  
(下) キヤバン途中  
からホカ  
ド7°7 (5930m)



気の中、辺りを睥睨（へいげい）するランタン・リルンが神々しい。一番高い頂稜に陽光が当り、モルゲン・ロートが徐々に下方に広がっていく。風が強いのだろうか、猛烈な雪煙がなびく。

ランタン・リルンはかつて日本隊が2隊も遭難した山だ。最初は1961年、大阪市立大学が雪崩で森本嘉一隊長、大島健司隊員、そして1956年日本初の8千m登頂を共にした名シェルパのギャルツェン・ノルブを失った。ヤラ・ピークの東に「モリモト・ピーク（6750m）」があるが、森本隊長の名を冠したものだ。

次に1989年、法政大学山岳部登山隊が安全とされた東南稜で、雪崩により3名亡くした。ヒマラヤの遭難はやはり雪崩によるものが圧倒的である。前者の遭難碑がランタン村にあるというが、私達は分からなかった。

ここでは1995年、日本のボランティア・グループによって小川を利用した水力発電が作られ公民館に送電され、成人学級が開かれているという。



朝食を済ませのんびり出発。今日の行程は教科書通り標高差約500m。行程としては楽である。ただ今泉、高岡、加藤は未知の標高なので注意も必要だ。

快晴のキャンジュン・ゴンバを後にする。ランタン・コーラの右岸の道をだらだらと登って行く。ランタン・リルンが次第に大きくなり、右手のキムシュンも大きい。右下の河原に飛行場が見えた。石がゴロゴロしているが、果して使われているのだろうか。簡単に今日の宿泊地ティキャプサ・カルカに到着。本来のキャンプ地でないので、狭かったり傾いていたり、あまり快適なところではなかった。

今日も裏山に高度順化に登る。4人でグングン登り簡単に4700mに着く。このように、ある程度の高度まで行動して、その後高度を下げて就寝するのが、高度順化に一番効果がある。他の人を待っていたが寒くてしょうがなかった。ちょっとガスが出て来たかなーと思ったら、雪がバラバラと降ってきた。やはり高度があるのだ。あまり寒いので加藤と一気に下ってしまった。

テントに帰ると昼食だった。最初にラーメンが出る。ちょっと鼻にツンとくる独特の匂いがあるこちらのラーメンだが、まずまず食べられる。

午後は女性軍のテントでダベリング。加藤はいつも賑やか。このキャラクターは貴重な存在である。ありがたいことだ。

テントの裏に回り小用を済ます。雲間にランタン・リルンが更に大きく聳えていた。眼をこらすと寒空の中、遙か彼方の急傾斜地に流れる氷河からの水をポーターがシバケツで汲んでいた。キャンプまで運ぶのも中々大変である。ただ、この水は後で飲んだ時、食器の底に砂がおっていた。

キャンプ地の下の放牧小屋はポーターが泊まる所だ。地面にワラが敷かれ、狭い場所に折り重なるように入り、煙をモウモウとさせ炊事の支度をしていた。結構寒いが素足の人

も何人かいる。母親と女の子もいた。ヒマラヤ登山の本を読むと、やはり山でのポーターの仕事は金にはなるが「辛い仕事」と言っている。こんな仕事をやらなくても生活できれば、誰もやらないだろう。ライトも無いので暗くなれば自然に寝てしまう。

私は今夜は寒そうなので病み上がりを考慮し、女性軍のテントで寝かしてもらった。酒はあったが飲まなかった。この高度では無理は出来ない。

夜になると昼間の雲もどこかに霧散し、ものすごい数の星が輝いていた。そして、今夜もシェルパ達の歌声がこだまする。

(次号に続く、ナマステ・ナマステ)



- (左) ティキャフサ・カルカから  
ホングンドフクをみる  
(人物・今泉)  
(右) 裏山への高度順化  
下にテント場がみえる